世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

幼児の歌のリズムと拍子のとらえ方について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教育学研究所 公開日: 2024-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高牧, 恵里 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000415

幼児の歌のリズムと拍子のとらえ方について

How Young Children Understand the Rhythm and Beat of Songs

高　牧　恵　里*
TAKAMAKI Eri

はじめに

人は胎児のころから脳の聴覚システムが発達しており、音の区別やリズムを感じることができ、出生後も音の区別やリズムやイントネーションが高く、音の記憶はできると言われている。そして、生まれてきた赤ちゃんに対して、母親がいろいろな学習能力を教えこむ傾向があるが、最近の赤ちゃん学では、赤ちゃんが自ら行動し、学習する能力があることを明らかにされてきた。

そこで音楽の３要素の一つの「リズム」は、心臓の鼓動として自分の身体の中にも存在し、身近な生物や無生物にも同期する現象を見ることができる。（2016. 小西）その例として、音楽の練習時に使用するメトロノームはテンポを合わせる音楽用具だが、同じ速度で２台を同時に鳴らすと、最初はバラバラに動くが、徐々に同期する現象が見られる。（2020. 今福・高牧）そのことと同様に、保育現場において、子どもたちが歌を歌って共鳴する状況は、子ども達の中で、歌う楽しみもさることながら、協調性や連帯感を感じることにつながるであろう。しかしながら、拍子や歌のリズムを正しく感じ取れないまま、大人に成長する人も少なくない。そこで、低年齢の時期の学びが大切であると考え、幼少期の音楽リズム活動に着目し、検証する。

１．研究の目的

幼児に子どもの歌の拍子と歌の旋律のリズムの理解を深め、幼児期に正確に歌を歌う、そして正しくリズムを感じ取る方法を検証したい。

２．研究の方法

『絆の音楽性』（2016. マロック、トレヴァーセン）によると、大多数の文化に存する音楽では、

* 武蔵野大学教育学部

リズムを定義することができる。リズムの知覚は、特定の生得的に備わった脳領域により処理されているのかもしれない。しかしながら旋律と同様、リズムのモチーフは、文化により高度に洗練されている点に注意を払う必要がある。そこで、「ミラーシステム」と呼ばれる脳システムが共有に認められる。このシステムを構成するニューロン（＊情報を伝達と処理に特化した特殊な細胞）では、ある人物の特定の運動を行なう場合と同種が同じ運動をしているのを見ている場合に活動電位が生じる。このことにより、リズム音は、心的イメージに喚起しやすく、運動生成に関わる運動前皮質や補足運動野といった領域に賦活すると示されている。このような点から音楽コミュニケーションの脳内メカニズムとして、感情状態や運動表出など人物間の情報伝達を「ミラーシステム」が担っているとしている。

音楽とリズムの反復活動に関して、リズムの弁別に関与する脳領域を検討した研究の報告が挙がっている。音楽家と一般人を対象とした機能的核磁気共鳴画像法 fMRI（1999）研究においては、単純なリズムを右側の小脳前部と左半球の運動前野と下頭頂領域で強い活動が見られた。しかし、６歳の子どもに対して、旋律やリズム知覚に関して fMRI（2004）を使って実施されたが、子どものリズムの弁別はあまり見られなかったとしている。

そこで、リズムや旋律の伝達という点に関して、幼稚園の園児さんに「手をたたきましょう」を使って、歌と旋律のリズムをたたく方法と手で拍子を取りながら歌う方法に挑戦してもらった。

上記の研究にあたり、先行文献を探したが、拍子とリズムについて、小学校の児童に向けて研究しているレポート（2010. 永田）はあった。また、リズムの獲得のための「鏡の活動」への取り組みは小学校で使われることの多い活動であることを学会の発表の中で聞いているが、小学校に上がる前の年齢での活動は見られなかったため、今回は幼児期の年長組での「鏡の活動」で取り組むこととした。

活動の取り組みは、予備調査として、2024 年 1 月 29 日（年少組）、31 日（年中組）、3 月 4 日（年少組）、本格的調査は、2024 年 5 月 29 日、6 月 5 日、7 月 2 日の有明こども園年長組のリトミック活動の中で取り組んだ。

＊心理検査出版「三京房」より

https://www.sankyobo.co.jp/dicneu.html

３．乳幼児の成長と音楽の発達について

乳幼児期の発達には、人との心の共鳴や共感が関係していることが記されている。発達心理学のマロックとトレヴァーレンの研究によると、赤ちゃんと養育者との音声からリズムやメロディーのようなもので音楽性を感じられる構造性があることを発見されている。（2016. 今川）

そこで、子どもが養育者と過ごす中で、歌を歌い始め、歌う技術や音楽に含まれる知識を自分のものに発達とともに徐々に獲得すると記されている。（2016. 今川）

いつごろから赤ちゃんの耳に音を感じ始めるのかというと、胎児の段階からマザリーズとして赤ちゃんの耳に入っており、生まれてから６～８週ごろになると「グー」「アー」という声を出し始め、マザリーズやオノマトペの音声を好む結果が報告されている。さらに声遊びやコミュニケーションをとれるようになると感情を感じ取れるようになり、音声の反復（基準喃語）も出て

くるようになる。音声の反復から、リズムが生まれ、身体の動きとの関連性も見られ、断片的な歌唱から、歌うことにつながるとみられている。

そして、徐々に子どもたちが保育園や幼稚園などの社会的、文化的な環境に入って、先生や友達と気持ちを伝え合えるコミュニケーションが取れるようになり、自分を表現できるように広がりを見せるようになる。(2016. 今川)

4．リズムの獲得について

『絆の音楽性』によると、霊長類種では、「ミラーシステム」という脳システムが共有に認められている。音楽のコミュニケーションと芸術の脳内メカニズムを詳細に理解するためには、行動目標とする人物間の情報伝達を脳内のミラーシステムが担っていることを裏付ける実験的証拠を集積する必要がある。

上記にも記したように、パーソンズ（2010）は、音楽家と一般人を対象にリズム、テンポ、拍子、時間の観点からリズムの弁別を行なった。その結果、小脳がリズム知覚ネットワークである主要な要素であり、運動することを「ミラーする」際に重要な要素であることが分かった。自分の脳で、見たもの、感じたものを模倣しながらリズムや旋律を脳領域でどのように獲得するのか検討された実験であった。(2016. マロック、トレヴァーセン)

また、『NHK for School』の「かがみになってあそぼう」という映像は、小学生二人が透明なシート越しに向かい合わせになり、動きの模倣をするという活動であった。

今回取り組んだリズム活動は、お友達２人組で鏡のように向かい合わせになり、「子どもの歌の拍子をとりながら歌う方法」と「旋律のリズムを取りながら歌う方法」の２種類を実践した。

5．リトミック活動の指導について

今回使用した曲目「手をたたきましょう」（小林純一 作詞／中田喜直 作曲）は、子ども達もよく知っている曲で、普段の保育の中でもよく歌っている。そして歌詞の中に手拍子をしたり、笑ったり、泣いたりする動作が入ってくるため、拍子感やリズム感を養うことができる曲として考えられたため、今回の活動に採用した。

リトミックの活動の一つの方法として、「手をたたきましょう」の指導法があった。

以下の通りである。

（１）「リトミック指導１」によると、３才児には、「４分音符♩」と「８分音符♪」のリズムを感じ取ることが掲げられている。(1983. 板野平・溝上日出夫)

①「４分音符♩」のリズムで歩く

②「８部音符♪」のリズムで走る

③「４分音符♩」「８部音符♪」のリズムを聞き分けて、歩く曲になったら歩き、走る曲になったら走る。

（２）「リトミック指導３」によると、「手をたたきましょう」（５才児）の指導内容には、以下のように示されている。

① ４拍子になれる（慣れる）

・４拍子の指揮をしながらいろいろなリズムをステップする。

・４拍子のいろいろなリズムに反応する。

② 歌唱について

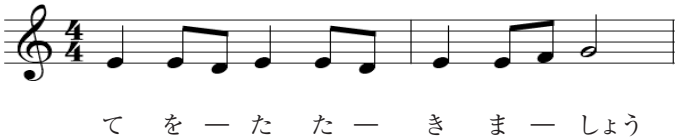
・お友達と向かい合って歌詞に従って動作をつける

・歌のリズムを手で打ちながら、うたいましょう

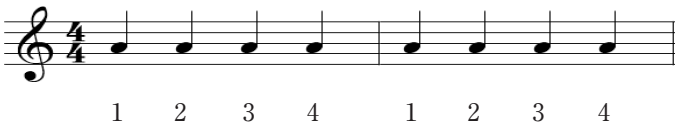
「４分音符♩」と「８分音符♪」が混在するリズムを使用しているため、ステップする指示が出ている。(1983. 板野平・溝上日出夫)

【譜例：手をたたきましょう】①旋律 ②拍子 ③リズム譜

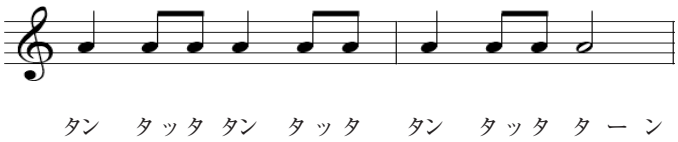
① 旋律



② 拍子



③ リズム譜



５才児の活動の中に「お友達と向かい合って動作をする」ことに対して、お友達と向き合い、模倣しながら拍子や旋律のリズムを取り合ってみることとした。

６．子どもたちとの音楽活動について

今回、有明こども園の年長組の園児さんに「手をたたきましょう」の歌を使った活動に参加してもらった。

「手をたたきましょう」は、日頃の活動の中でも歌っており、子どもたちが歌い始めたら、手拍子が入るところで上手に叩いていた。活動の様子を動画に記録し検証したが、数値としてあげることは難しかったため、以下のようにエピソード記録として記載することとする。

（1）「手をたたきましょう」の「４分の４拍子」の拍子をたたきながら歌うことができるか挑戦

してもらった。子どもたちを見ながらピアノ伴奏をする活動だったが、予備調査として始めた１月と３月の様子は、以下のとおりである。

・１月に取り組んだ年少クラスでは、クラスの２分の１くらいの園児さんができていた。
・３月に取り組んだ年少クラスでは、クラスの３分の２くらいの園児さんができていた。

５月以降は年長クラスの園児さんの活動の中で実施した。

・５月：拍子をとりながら歌うことは、クラスの半分以上の園児さんができていた。
・６月：拍子をとりながら歌うことは、５月で活動した時より増えていた。
・７月：拍子をとりながら歌うことは、クラスの３分２以上の園児さんができていた。
　　歌を歌いながら、拍子を叩くことは、比較的取り組みやすいように見える。

（２）「手をたたきましょう」を旋律のリズムをたたきながら歌うことに挑戦してもらった。

・１月に取り組んだ年少クラスでは、クラスの５分の２くらいの園児さんができた。
・３月に取り組んだ年少クラスでは、クラスの半分くらいの園児さんができた。
　しかしながら、４分音符と８分音符の組み合わせの「タン・タッタ」のリズムを叩くのは難しく感じているようだった。
・５月以降は年長組の園児さんの活動が中心となった。
・５月の活動では、旋律のリズムの練習をしてから取り組んだが、少し難しく感じている園児さんが多かった。園児のそばで一緒に叩いてあげると理解を示し、リズムにはまるようになった。

（３）「手をたたきましょう」を２人組になって、拍子を叩きながら歌うことと、旋律のリズムをたたきながら歌うことに挑戦してもらった。

①６月と７月の活動では、２人組になり、かがみのように向かい合って拍子をとりながら歌ってもらうことをした。

・６月の活動で、２人組で拍子をとりながら歌う動作は、少し照れ臭いような仕草は見られたが、お友達と一緒に動作を共にするため、最後はとても楽しそうに歌っていた。
・７月の活動では、最初に４分の４拍子を手でたたいて、拍子感をしっかり感じとってから、２人組になり、拍子をとりながら歌ったが、大多数の園児さんは、お友達と一緒にできるようになっていた。

②６月と７月の活動では、２人組になり、鏡のように向かい合って旋律のリズムをとりながら歌ってもらう活動をした。

・６月の活動では、２人組になって歌の旋律を叩きながら歌うことが難しそうだったが、数回繰り返すと理解を示し、思いっきり歌の旋律と一緒にリズムを叩いている園児さんが増えた。
・７月の活動では、６月の活動から１か月空いていたが、２人組で拍子を感じながらも、歌の旋律のリズムを叩きながら歌えるようになった園児さんが６月より増えてきた。

７．考察と今後の課題

大人でも、拍子をとりながら歌を歌うことができても、歌の旋律を叩きながら歌うことはなか

なか難しいという事例に出会うことがある。日頃の音楽活動から、拍子をとること、歌などの音楽の旋律を手拍子でとることを繰り返すことで、拍子やリズムを感じることができるようになると思われる。今回は、手拍子の方法を使ったが、歩いたりするなど身体全体を使うことにより、より体全体で拍子やリズムを感じることができると、リトミックや身体表現の活動にもより活かされることだろう。

今回、後半の活動で２人組になって一緒に活動してもらったが、お互いに真似っこ（模倣）することで、拍子が整ったり、旋律のリズムが直ったりすることがあった。「かがみ」のようにお互いの行動が映し出されることは、お互いに良い影響をもたらしていると思われる。

さらに、リズムを叩く時に、自分の手だけで取っていた場合と、お友達の手と手を合わせて叩いている発展した姿も見られ、リズムによるコミュニケーションの楽しさを感じている２人組の姿も見られた。このような活動が、単に拍子やリズムの音楽性を引き伸ばすだけでなく、社会性も育てることができることが分かった。

今後のリズム活動でも、２人組での活動を取り入れ、拍子とリズムについてさらに掘り下げ、子どもたちのリズムや拍子の理解が深められる活動を検討し、小学校の音楽の授業への受け渡しができるように研究を続けたい。

（謝辞）

この取り組みにご協力をいただきました、武蔵野大学附属有明こども園の先生方、そして園児の皆さんに深く御礼申し上げます。

【参考図書】

今川恭子監修『音楽を学ぶということ―これから音楽を教える･学ぶ人のために―』2016 年, 教育芸術社, p.10

今福理博・高牧恵里『保育園におけるリトミック活動の実践と１，２歳児の模倣行動の発達的変化の検討』武蔵野教育學論集第 10 号 , p.77-78

【参考資料】

三京房　https://www.sankyobo.co.jp/dicneu.html

永田千代子『子どもの拍感・拍子感・リズム感を育てる授業―ダルクローズ・メソッドを応用したカリキュラムに基づいて―』2010 年，宮崎大学大学院レポート

【参考映像】

『NHK for School』「かがみになってあそぼう」
https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das_id=D0005280068_00000

【引用文献】

小西行郎･志村洋子･今川恭子･酒井康子編著『乳幼児の音楽表現―赤ちゃんから始まる音環境の創造（保育士･幼稚園教諭養成課程）』2016 年，中央法規出版株式会社，p.2-4

スティーブン･マロック、コルティン･トレヴァーセン編著『絆の音楽性　つながりの基盤を求めて』2018 年，音楽之友社，p.158-159

板野平・溝上日出夫監修『ダルクローズ・システムによる［リトミック指導１］』［３才児用］，1983 年，全音楽譜出版社，p.17-19

板野平・溝上日出夫監修『ダルクローズ・システムによる［リトミック指導３］』［５才児用］，1983 年，全音楽譜出版社，p.78-79